

コロンビアに住んで

北村 正博

此处コロンビアに住んでもう 20 年近くになる。最初に来たのが 1989 年 12 月であるから 25 ～ 26 年間で 20 年近くもコロンビアに住んだことになる。ほとんどが日本企業の駐在員であるサラリーマン期間であるが、一昨年日本の会社を定年退職したので、ここ 2 年程は自由業といえよう。

さて、今でも思い出すが、1989 年 12 月初めにコロンビアに到着した私は、1 週間後に 500kg の自動車爆弾が当時の DAS（外国人管理局）事務所の前で炸裂した洗礼を受けたのである。幸い当時勤務中の事務所は車で 40 分程度はなれていたの難を逃れたが、爆発現場の割と近い距離にあった取引先の事務所に見舞いに行った時のことである。DAS 事務所の前を通ったら、現場は勿論人だかりになっていた。近くに車を止め、そこに野次馬根性で行って見たら、地面に直径 10m 程の大きな穴が出来ていた。爆発は朝の早い時期であったから人的損害は限られていたが、DAS 事務所ビルだけでなく周りのビルも窓ガラスがない。それが 1 km 近く離れた取引先事務所も同じである。

当時は、何という国に来たのか、という印象が強かったが、その後コロンビアの麻薬マフィアが各地で連続して自動車爆弾を破裂させる事件が相次いだために、この印象も時間の経過とともに色あせていった。というのは、出張でメデ

ジン市内空港に到着し、タクシーに乗ろうとしたら、街の中心から轟音とともに黒い雲が舞い上がったのである。後で聞いたら、昼食はその近くのレストランを予約していたと取引先からいわれた。またボゴタの事務所の横の駐車場で夜自動車爆弾が破裂した。当時は友人とともに近くの日本レストランで夕食を取っていてその音に驚いた記憶がある。等々、何ともいえない緊張感が続いた。

次のコロンビア勤務は店長として、2002 年春である。前回の駐在は 1995 年 12 月で終わっていた。今度は、麻薬マフィアが主役ではなく FARC、ELN などのゲリラが主役である。誘拐、殺人、犯罪などで極端に社会の治安が悪化していた。週末夜、家族とともに昔通ったレストランに行った帰り、夜 9 時になると大通りでもほとんど人影がなく、両側の街灯も暗かった。同じく週末にゴルフに出かけるのにも、郊外のゴルフ場に行くのは誘拐に注意した方が良くといわれた。郊外に出ると、やたらに警官の検問があった。理由はボゴタの街に入る、出るゲリラ関係者をチェックするためである。時々この警官がゲリラの偽警官なのだという。これで誘拐される外国人がいるが、というのは、外国人は身代金の金額が張るからだ。

このゲリラの、さらにゲリラ・シコンパによる偽警官によって誘拐された後、ゲリラ側と所属の日本企

業間で身代金交渉が行われたが、金額が高く吊り上げられ過ぎたために纏まらず、結局ゲリラに殺された日本人サラリーマンがいた。山中で居場所が分からないように、ゲリラ集団に連れ回され、最後は政府軍が近くに来たため、足手まといになるので殺されたのである。日本人として非常に残念であった。当時、日本人駐在員でボゴタに勤務していた者全員が強い憤りを感じたものである。

その後がまた大変である。多くの日本企業が、治安の悪い、かつビジネス・チャンスも極端に減ったコロンビアに駐在員を出す必要がないというのである。駐在員の数が減り、店を閉める日本企業もあった。という私も、当時の上司からコロンビアとベネズエラの両国を管轄し、本拠をボゴタではなくカラカスにして、必要な時にボゴタに行く方法を取るようにいわれた。もちろん、ボゴタとカラカスの両方に社宅を持ったままだから、出来るだけ両方を見るようにする。そうすると 1 ヶ月に必ず 10 日程ボゴタに行く。この行き来で一番苦勞をかけたのが家内である。生活パターンが崩れたのである。今でも彼女には非常に感謝している。

3 回目が 2007 年 2 月からの自動車関係の出資会社への出向で、再度ボゴタに来た。2 回目駐在でコロンビアを出たのが 06 年 12 月末だから、僅か 2 ヶ月弱の日本への

帰任であった。今回は、社会状況・環境ががらりと変わっていた。02年に選挙で大統領に選ばれたウリベ大統領は、それまでの大統領とは異なり国の経済を回復させ堅調なものにするには、先ず治安の回復が大前提であるとし、彼の強い指揮の下、政治的安定・国内治安に尽力した。結果、毎年ボゴタから郊外に、地方に出かけられる距離が増えて行った。それと同時に、経済も見える見るうちに、回復したのである。この3回目からのボゴタでの生活は、本当にコロンビアに春が来たと感じたものである。2010年になると現地トヨタ販売代理店の社長になったこともあり、地方のディーラー訪問に頻繁に出かける機会に恵まれた。1回目、2回目の駐在時代には決して行けなかったセサル州バジェデユパール市、グアヒラ州リオハチャ市、コルドバ州モンテリア市とシンセレホ市、アンチオキア州アパルタド市、カサナレ州ジョパール市等である。11年くらいになるとこれらほとんどの都市でショッピング・モールが出来た。社会見学と地方都市の消費経済の進展具合を見るために、必ずこれらのショッピング施設に出かけることにしている。そこで必ず感じるのは、ボゴタのショッピング・モールに出展しているコロンビアのブランド商品が必ず地方にも進出していることである。そのモールを散歩がてら家族と歩く人達も非常に明るく、幸せそうである。大きく変わったのである。

地方の都市でも車は新しくなっており、人々が着ている服装も最近のものが多く、かつ流行ものである。ボゴタと気候が似ている都市では、米国の町の流行の服装を



ボゴタ市の新しいショッピング施設の一つ Santa Ana モール (筆者撮影)



ボゴタ市の中でいつも車が混雑する Calle 100 と Carera 15 の交差点 (筆者撮影)

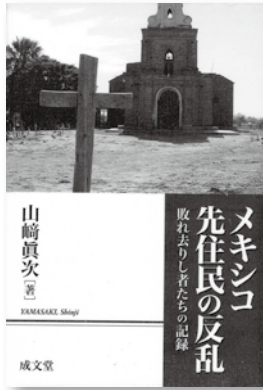
特に若者が愛用しているのが目に付く。その明るさ、モダンさに、時々、我々日本人の服装の方が地味であると感じる時がある。以前はそうではなかった。レストランも変わった。昔は肉料理、コロンビア料理のレストランに誘われたが、今はイタリア料理、スペイン料理、海産物料理のレストランが中心である。また飲み物もワインが中心である。アグアルディエンテ酒(砂糖黍から作られるアニス入り焼酎)なんか昔の酒と思われる。僅かこの5年でコロンビアの地方都市にもラテンアメリカ、米国、欧州の影響が皆の社会生活に及んできている。最近いつも思うのは、通信の近代化でテレビ、インターネット、携帯電話が、ボゴタの町と500km以上はなれた地方都市の人々の距離をあっという間に縮めてしまったのである。

地方の山中で生活しているゲリラまで最近のテレビ、インターネット、スマートホンを見ているの

である。ゲリラも人間である。綺麗なもの、美しいもの、美味しいものに憧れる。それ故、最近では若い連中ほどゲリラ集団から脱走し、普通の社会生活に戻る輩が増えているという。それゆえかどうか分からないが、ゲリラも今回だけは真剣に政府との和平協議を進めているという。本当にこれまで望まれてきたコロンビアの平和は、武器銃弾は必要でなく、テレビ、インターネット、スマホで可能ともいえなくはない。それ程コロンビア人は現実的なのかも知れない。

(きたむら・まさひろ

トヨタ・デ・コロンビア社社長)



『メキシコ先住民の反乱 敗れ去りし者たちの記録』

山崎 真次 成文堂 2015年1月 222頁 3,400円+税
ISBN978-4-7923-7102-9

歴史は勝者が語るものであり、不都合な真実、敗者の声は勝者に隠蔽され貶められてきた。本書はメキシコ各地で19世紀に起きた反乱を主に敗者の声を、古文書の断片や歴史証言の矛盾等の手懸かりなどから考察しようとしたもので、1847年から50年間続き20万人以上の死者を出したユカタン半島でのカスタ戦争、メキシコ市郊外チャルコ地域で1868年に勃発し、ベニート・フアレス政権への全面的蜂起になったフリオ・ロペスの反乱、1857年から73年の間続いたインディオの血を引くマヌエル・ロサダが率いたハリスコ州の反乱、北部ソノラ州で1533年のスペイン軍侵入以来19世紀半ばから20世紀初頭に至るまで政争・革命に翻弄され、1900年には戦闘により捕虜になった住民がユカタン半島等に奴隷として売られるまでされてきたヤキ族の反乱を取り上げている。

これらの先住民による反乱は、アセンダド（大農園主）による農民から土地を強奪、先住農民の共同体の解体、富裕な白人農園主と貧しい農民との間の土地紛争に起因するが、著者は最後にこれら4つの反乱の地域別特徴に注目し、反乱が長期にわたった理由を7項目の特性を比較することにより、それぞれの反乱の特徴を明らかにする。スペイン王室はアシエンダや鉱山を経営するクリオージョ階層の経済的権益拡大には積極的でなく、人頭税を納める農民を保護することで均衡を図ったのに対し、独立後政治的指導者となったクリオージョの政治家・官吏はアシエンダや鉱山主が多く、19世紀以降政治権力と経済権力が一体化し、むしろ農民を搾取する構造が支配的となり、隷従するか武装蜂起かの二者選択から反乱が起きたと指摘している。

〔桜井 敏浩〕



『南米につながる子どもたちと教育 —複数文化を「力」に変えていくために—』

牛田 千鶴編 行路社 2014年8月 261頁 2,600円+税
ISBN 978-4-87534-300-4

日本に暮らす外国人の公立小・中・高校生等は7万人超、うちポルトガル語とスペイン語話者が約46%を占めるといわれる。本書はこれら南米につながる子供たちを取り巻く教育環境を探り、日本各地に出現した複数文化の保持が本人たちにとってはもとより地域社会にとっても有益であるとの視点から、教育への行政・学校・支援団体の取り組みを日本語および母国語教育を含めてその課題を論じ、また日本で育ち学んだ南米系の子供たちの体験を語らせることにより、困難を乗り越え次の段階に進もうとする後に続く子供たちへの前向きなメッセージを伝えようとするものである。

第一部「言語文化と教育をめぐるエンパワメントの取り組みと課題」では、多様化する子どもたちと学校教育の現場、言語環境、言語教育と学習支援体制、多文化共生、日本の学校に行っていない子どもたちへの支援、多文化アクターを目指すブラジル・ペルー人学校とそこでの日本語教育、コラムでブラジルならびにペルーと日本の教育事情比較を紹介し、第二部「日本で育った南米につながる若者たち」では子ども時代を振り返った7人の南米系若者が体験と軌跡を述べている。

〔桜井 敏浩〕